

はじめに

本当の WIDE

WIDE プロジェクト 2001 年度の活動はプロトコル技術からアプリケーションに至るインターネットアーキテクチャやプロトコルそのものに関する研究開発、それらの集大成としても位置づけられ、さらに、次世代インターネット技術全般の社会への発展の説得力を示すアプリケーションに関する実証実験など多岐に渡り、それぞれ大きな成果を上げることができた。

このそれぞれの成果は IETF などのプロトコル開発コミュニティはもちろん、他の専門分野や産業界を通じて国際的に大きな関心を持たれている。そもそも、WIDE プロジェクトの活動はグローバルな空間をテーマとした研究活動であり、国際的な連携や展開に関する調整には積極的に取り組んできたつもりだったが、具体的な成果が広がるにしたい、その国際的な関心の拡がりや強まりを感じ続けてきた。先端研究者が WIDE での研究活動を希望して来日するケースも増加し、メンバーの多くが「WIDE の実態はどうなっているのか」という問い合わせを受け始めた。

そこで、2002 年 1 月にはスタンフォード大学において成果発表会を開催、3 月の合宿では「WIDE の国際的な責任」と題する議論を行い、Web ページなどの英語での情報公開性を高める一方、研究活動レベルの交流の強力な推進を図っている。2002 年夏のアジア初の横浜 IETF 開催を含め、さまざまな機会を通じた経験が WIDE メンバーの今後の国際的なチャレンジやそのための自信の源となることを願っている。

数年来続けている位置情報とインターネットに関する研究活動は、インターネットと自動車に関する実証実験などを通じて新しい展開を進め、その結果、WIDE の中ではこれらを含めた新しいコンセプトでの研究領域の像が結ばれ始めている。3 月の合宿では名札として RFID を使用し、位置と情報空間の可能性へ向けた実験も開始された。このように、センサーや情報家電などを接続する IPv6 時代のインターネットのコンセプトの拡がり、位置情報やセンサデータなどとの関連で実空間でのさまざまな情報活動に革新的な基盤を形成しつつある。P2P のトラフィックは Web の出現以来初めて http を急迫する急増志向のトラフィックとして観測されている。セキュリティやプライバシーに関する緊急の要求に対する研究側からの対応は、この分野の社会展開の生命線にも影響する重要課題となっている。

これらすべての要素は、インターネットの提供する情報空間が、もはや、論理的な「仮想」空間としての役割だけでなく、人間の活動する「実空間」の基盤としての役割を果たし始めたことを示している。広域に分散された自律的な実空間を、どのように協調してグローバルな空間として創造できるかという WIDE の名前にこめられた課題への本当の挑戦がスタートしたともいえる。2001 年度の研究活動の報告にあたり、WIDE の

活動を支援していただいているすべての方に心からの感謝を捧げ、今後とも厳しいご指導をお願いすることでご挨拶とさせていただきます。

2002年6月7日

WIDE プロジェクト代表
村井 純